

## 巻 頭 言

『教育論叢』は今年で57年目を迎える。

『教育論叢』とは、教育科学専攻の院生によって編集・執筆される学術雑誌であり、「教育科学専攻院生の研究創造活動の集大成」として発行されている。しかし、近年の『教育論叢』の巻頭言を見てみると、「創刊当時にあった勢いはほとんどない。執筆者の数を集めるだけでも大変であり、検討会の参加者も少ない。論叢委員も好んで委員を引き受けているわけではない。これまで続いってきたから今年もやるといった程度の動機によって、半ば機械的に集められた大学院生が、研究の片手間に与えられた仕事をこなしている」（第54号）に代表されるように、『教育論叢』の意義そのものに疑問が投げかけられてきている。

その背景にあるのは近年の大学院の機能の変化や大学院生の志向性の変化であろう。確かに『教育論叢』の創刊当時と比べると、大学院生像は大きく様変わりしている。かつての大学院は少数の研究第一の学生が集うところであった。しかし近年では、志の高い学生も当然数多くいるものの、一方で、学生期間の延長のため、就職活動がうまくいかなかったため、学部時代には入れなかった憧れの大学で勉強するため、などといったように表にこそ出さないが必ずしも研究が第一とは言い切れないような理由で入学する学生が増えているように思われる。それに伴って、『教育論叢』の位置づけも変化し、以前は誰かが書くならみんなが書くという風潮であったが、今では少数の限られた人だけが書く（書かないのが当たり前）という風潮になってきている。

では、『教育論叢』はいらないのか。その使命はもう終わってしまったのであろうか。少なくとも私はそうは思わない。むしろ、そういう時代であるからこそ、研究第一の大学院を維持するために、あるいは、研究第一の大学院を復興するために、院生発の研究創造活動を行っていく必要がある。『教育論叢』はその中核をなすものであり、今後も大きな役割を果たすことが期待される。

今年の『教育論叢』には6名のエントリーがあり、全員が最後まで書き上げることができた。途中で困難に直面することもあったが、執筆者、助言者、検討会参加者の相互の協力により完成させることができた。また、今年の『教育論叢』の特徴として、執筆者や検討会参加者に例年より多くの博士後期課程の学生が含まれていたということが挙げられる。博士前期課程の学生のみにとどまらない編集・執筆活動が少しはできたのではと思っている。本誌に掲載されている論稿が、多くの読者の目に触れ、さまざまな視点からのご批判ご教示をいただけることを願ってやまない。

2014年3月

名古屋大学大学院教育発達科学研究科教育科学専攻  
『教育論叢』第57号編集委員長

須田 昂宏